

# 林の峰遺跡

——「県営ひばりヶ丘団地」建替に伴う発掘調査報告書——

2000年3月

茅野市教育委員会

*HAYASHINOMINE SITE*

# 林の峰遺跡

——「県営ひばりヶ丘団地」建替に伴う発掘調査報告書——

2000年3月

茅野市教育委員会

## 序 文

国宝『土偶』が出土した棚畠遺跡を始め茅野市には、国特別史跡尖石遺跡、国史跡上ノ段遺跡など多数の縄文時代遺跡があり、わが国における縄文文化の宝庫であります。

ここに報告する林の峰遺跡は、茅野市の南側にある縄文時代から平安時代にかけての遺跡として知られていましたが、発掘調査は行われないまま市内で最も早い昭和30年代末から住宅団地造成が始まったため、内容などは未解明な遺跡となっていました。

平成6年度に、長野県住宅部が林の峰遺跡の一部にある県営ひばりヶ丘団地の建替をすることになり、大がかりな再造成が計画されました。

不明な点が多い遺跡のため平成7・8年度に試掘調査と一部本調査、平成11年度に発掘調査を実施しました。

林の峰遺跡が位置する宮川地区には昭和53年に発掘調査された縄文時代後期から晩期にかけての大遺跡「御社宮司遺跡」、平成4年に調査の中世城下町「千沢城下町遺跡」などが知られています。

今回の調査では長野県内最大級の黒曜石石核の出土や、縄文時代中期の集落跡、方形柱穴列、土坑などを発見しており、林の峰遺跡で未解明、未発見の資料を集積することができます。

発掘された林の峰遺跡の貴重な文化財と共に、本書が多くの人々に広く活用され、また郷土を知り学ぶことで、地域文化の向上に役立てば幸いです。

最後になりましたが平成7年の試掘調査から本書の作成までご協力頂きました地元の皆さん、並びに、発掘調査に参加された多くの皆さんに厚くお礼を申し上げます。

平成12年3月

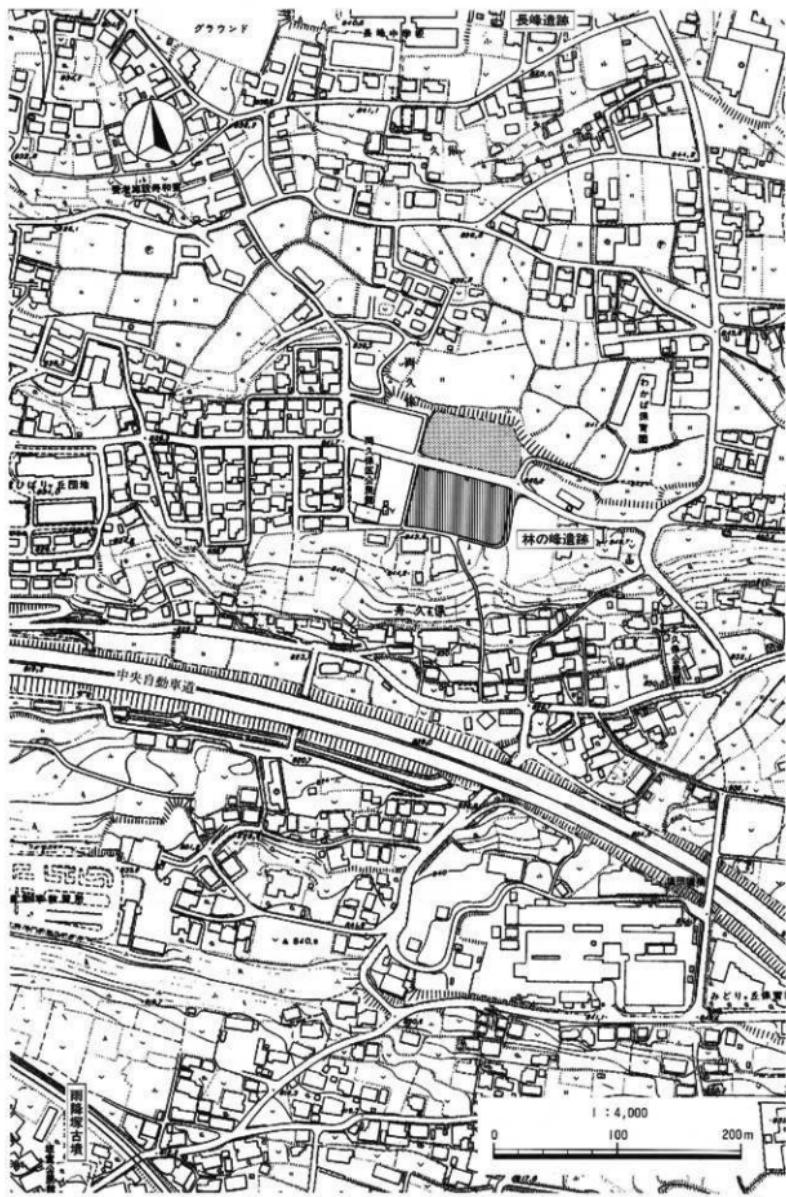
茅野市教育委員会  
教育長 両角 源美

## 例　　言

1. 本書は、県営住宅ひばりヶ丘団地建設に伴い、長野県から茅野市教育委員会が委託を受け実施した「長野県茅野市宵川林の跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は茅野市教育委員会が平成7年度、8年度、11年度にわたって実施しているが、報告書について  
は長野県住宅部住宅課と協議の結果3年度分を合わせて発行することになった。調査の組織等の名簿は発  
掘調査組織として別載してある。
3. 発掘調査は平成7年度が9月7日から9月25日まで、平成8年度が8月21日から8月23日まで、平成11年  
度は6月1日から9月6日までと立合調査を11月25日から12月1日まで実施した。なお、出土品の整理  
及び報告書の作成は茅野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターにおいて行った。
4. 発掘調査から本書作成までの現場は平成7・8年度が柳川英司、平成11年度を百瀬一郎が担当し、執筆  
分担は第II章の平成7・8年度関係と第III章第1節～第3節が柳川英司、残りを百瀬一郎が担当した。
5. 本報告書に掲載の遺構の実測図は、住居址、方形柱穴列、土坑を1/60、遺物は旧石器時代の石器を2/3、  
縄文時代の土器を1/6、石器は1/3を原則として、縮尺比の異なるものは比率を記してある。
6. 調査区の基準点は国家座標基準点による。また遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
7. 本報告にかかる出土品、諸記録は茅野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターで収蔵、保管している。

# 目 次

序 文	
例 言	
目 次	
第Ⅰ章 林の峰遺跡の環境と研究史	1
第1節 林の峰遺跡の位置と環境	1
1 遺跡の位置と地理的環境	1
2 遺跡の立地と周辺遺跡との地理的関係	1
第2節 林の峰遺跡研究の歴史	2
1 遺跡の研究史	2
第Ⅱ章 発掘調査の概要と諸事業の記録	3
第1節 発掘調査の経過	3
1 発掘調査の経過	3
2 発掘調査日誌抄	3
3 遺物の整理と報告書作成の作業	4
第2節 発掘調査の方法	4
1 発掘調査組織	4
2 発掘調査区の設定	5
第Ⅲ章 発掘された遺構と遺物	6
第1節 林の峰遺跡の層序	6
第2節 平成7年度の調査	7
第3節 平成8年度の調査	7
第4節 平成11年度の調査	11
第Ⅳ章 まとめ	27
抄 錄	



第1図 林の峰遺跡の位置 (1/4,000)

# 第Ⅰ章 林の峰遺跡の環境と研究史

## 第1節 林の峰遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境

林の峰遺跡は、長野県茅野市宮川5,005番地他に所在する。JR中央本線茅野駅から東南へ約2kmの地点で二久保と舟久保、下北久保集落中間の尾根上に位置している（第1図）。

遺跡の位置する宮川地区は諏訪盆地の南端にあたり、フォッサマグナの西縁を形成する糸魚川～静岡構造線の釜無断層により北西から南東方向へほぼ一直線に分けられ、諏訪湖（標高759m）の流入河川である宮川水系により西側は急傾斜な赤石山系の守屋山（標高1650m）・入笠山（標高1955m）山麓、東側は火山活動による堆積物で覆われた広大な裾野を持つ南八ヶ岳（最高峰赤岳、標高2899m）山麓に画された丘陵部と小規模な扇状地、沖積地から成っている。林の峰遺跡がある八ヶ岳西南麓の火山泥流の表面には、古期、新期の信州ローム層が堆積し、この上面を腐食土層が覆っている。裾野の標高1000m付近から下では涌き水が各所にあり、幾筋も集まつた流水の小渓流によって開析谷が形成され、宮川、上川に注いでいる。開析谷は浸食が進むと長峰状の尾根を造り出しており、本遺跡もこのような台地上にある。

宮川の幹線は、道路が東西を八ヶ岳の裾野の原村柳沢から玉川を経て、林の峰遺跡がある舌状台地の北側に延びている長峰状の尾根上を通り、木落して平坦地に降り、甲州街道、国道20号線と交差、安国寺で伊那方面に繋がる枝突街道と交わり、諏訪大社へ続く通称御柱街道と、南北方向は河成段丘沿いにJR中央東線、甲州街道と国道20号線が並行し、長峰の先端を結ぶように中央自動車道西宮線が通過している。地区内には信濃國一宮である諏訪大社上社前宮が鎮座し、原始、古代より、諏訪地方の産業、文化の人口あるいは起点として栄えており、現在でも流通には重要な役割を持って発展、興隆している要衝である。

### 2 遺跡の立地と周辺遺跡との地理的関係

林の峰遺跡は、八ヶ岳からの火碎流や泥流の堆積によって構成された広原状の通称「原」の西方に展開する開析谷によって形造られた尾根の台地上にある。台地の基層は黄褐色を呈し、安山岩系の川疊を多く含む八ヶ岳の噴出物で、この上に黄褐色で粒子が細かく、礫をほとんど含まない風成ロームが厚く堆積し、これを腐食土層が覆っている。

遺跡は北が二久保の沢、南が舟久保の沢によって東西方向に画された長峰状の丘陵上にある。この丘陵の南斜面には數ヶ所の湧き水があり、流れ出た湧水は宮川支流の田沢々川に小渓谷を成しながら直交して流れ込んでいる。晴天時には遺跡の位置する台地から北方遙かに槍ヶ岳を始めとする北アルプスの連峰を望み、中景に塩竈峰、諏訪湖、霧ヶ峰、草山、大門峰、東方に蓼科山から大河原峰、八ヶ岳が連なり、南方から西方にかけては赤石山系の甲斐駒ヶ岳を遠望、手前に入笠山、枝突峠、守屋山が360°のパノラマで眺めることができる。

林の峰遺跡周辺の遺跡は、北から二久保の沢を隔てた長峰中学校のある台地東側に広がる绳文時代中期の中核集落遺跡となる長峰遺跡、本遺跡に続く丘陵東側で绳文時代前期、中期の集落を発見している古御堂遺跡、中世の葬送儀礼に関わる遺構が多く見つかっている神垣外遺跡、南側には绳文時代の長峯（比丘尼原）遺跡、直刀や玉類が出上した附降冢占墳、本遺跡のある丘陵西側先端に绳文時代の狐久保遺跡がある。

## 第2節 林の峰遺跡研究の歴史

### 1 遺跡の研究史

林の峰遺跡の考古学的調査は信濃教育会諏訪部會が1924年（大正13年）の『諏訪史』第1巻発行に伴い実施しているのが最初である。同書の「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」には宮川舟久保林ノ峰発見の遺物として磨石斧があり、所在は宮川小学校と記されている。

1956年（昭和31年）信濃史料刊行會発行の『信濃史料第1巻上』の第1地名表A遺跡 諏訪郡茅野町宮川地区には 遺跡 部落字地 舟久保林ノ沢 地形 台地 遺物（縄）加曾利E式、石鎌・打石斧・石皿（土）前・後期 備考（藏）矢島數出との記載がある。

1958年（昭和33年）諏訪史講談會発行の『諏訪史講要項16茅野市宮川篇』では、同要項内の宮川地区跡査図で、舟久保の北東側に林の沢遺跡として示されている。しかし遺跡の内容についての説明はない。

林の峰遺跡の内容が最初に報告されたのは、1959年（昭和34年）今井すみ江さんが刊行した『旧宮川村史編纂会研究其の6』「旧宮川村に於ける縄文式文化時代（附弥生式文化時代）遺跡」においてであり、遺跡物地名表のほかに、現在の林の峰遺跡を舟久保林ノ峯（林ノ沢）遺跡として詳細に記載しているので転記する。  
(団省略)

#### 舟久保林ノ峯（林ノ沢）遺跡

南北両長峯の間に矢張り東西に走る尾根の丘陵があり、二久保の沢と舟久保の沢に挟まれた舟久保部落の北方上の丘陵南側に縄文時代中期後葉の加曾利E式土器破片が点在している。<sup>(団)</sup>

当地域の地形は長峯と同様別に特記することなく、遺物散乱地帯も、当然遺跡があつて然るべき場所である。採集された土器破片は余り良い資料が得られないが、加曾利E式でも明晰な資料の中では後期に近いものが多い。

土器が大分多く、前期、後期のものがある他、石鎌、石斧、石皿等が採集され、矢島數出の処に磨製或は半磨製の煌斑岩の定角式石斧、打製分銅型（or短冊型）各閃片岩小型の石斧等が所蔵されている。

弥生式土器か、器内は厚いが波形文の施文は中期弥生式であるが（挿入図）よく知らない。

と記されている。

1980年（昭和55年）に長野県教育委員会から発行された「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書 昭和54年度」から遺跡番号147を使用している。同報告書では林ノ峯遺跡として縄文時代加曾利E式土器、石皿、石鎌、打製石斧、平安時代土器が遺物として確認されている。

1986年（昭和61年）茅野市から刊行された「茅野市史 上巻 原始古代」には

林ノ峯遺跡 宮川舟久保の北側に長峰遺跡の台地と並行するかなり規模の大きな台地で、茅野市ではもっとも早く住宅団地が造成された。開発により遺跡の大部分は解明されることなく失われた。縄文時代中期の土器片や、打製石斧・石鎌等が採集されている。台地の東南部が畠として残されており、遺物が散布している。と説明している。

1991年（平成3年）茅野市教育委員会は「茅野市遺跡台帳」を発行しているが、これは「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書」を踏襲している。

## 第II章 発掘調査の概要と諸事業の記録

### 第1節 発掘調査の経過

#### 1 発掘調査の経過

平成7年度

試掘調査は平成7年8月に行い、発掘調査は平成7年9月7日から9月25日にかけて行った。

平成7年6月26日 「県営住宅ひばりヶ丘団地の建替に伴う埋蔵文化財に関する協定について(協議)」を長野県知事吉村午良と交わす。

平成7年7月3日 「林の峰遺跡の埋蔵文化財発掘調査委託契約書」により長野県知事吉村午良と発掘調査業務委託の契約を11,859,000円で締結。

平成8年度

試掘調査は平成8年8月21日から23日まで行った。

平成8年7月26日 「県営住宅ひばりヶ丘団地の建替に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約の締結について」により長野県知事吉村午良と発掘調査業務委託の契約を657,000円で締結。

平成9年3月19日 「林の峰遺跡の埋蔵文化財発掘調査委託変更契約書について」により、委託金額を401,000円に変更。

平成11年度

平成11年6月1日付で長野県と茅野市との間において「林の峰遺跡の埋蔵文化財発掘調査委託契約」を委託料13,167,000円で締結する。

平成11年6月1日発掘調査開始、9月6日調査終了。長野県住宅部住宅課へ引渡しを行う。

11月22日本工事に伴い調査区外周道路の路盤入換作業中に道路敷から遺構が見つかり協議の結果工事を止め立合調査を行うことになり、11月25日開始、12月1日終了、長野県住宅部住宅課に引渡しを行う。

平成12年3月13日 「林の峰遺跡の埋蔵文化財発掘調査委託契約の一部変更契約」により、委託金額を12,400,000円に変更。

#### 2 発掘調査日誌抄

平成7年度発掘調査

9月7日 遺構確認を行う。打製石斧などの検出を行う。9月8日 遺構確認を行う。9月18日 遺構確認。

9月19日 遺構確認。9月20日 遺構確認。9月21日 第1号土坑の発掘。遺物の出土は見られず。周辺から土器片や石皿などが出土。9月22日 遺跡全体の消掃を行い、写真撮影を行う。9月25日 実測を行い、機材を撤収し、発掘を終了する。

## 平成8年度

8月21日 試掘調査。9本のレンチを開けた。遺物の出土はあるが、明確な遺構は確認できなかった。遺物は尾根の北側に散布するのみである。8月22日 平面図作成。遺構確認。全体的に遺物の散布が見られる。トレンチ1・3・5・6より中期中葉の土器片や黒曜石片・打製石斧が検出された。また、トレンチ3よりIII石器時代の黒曜石石刃を確認することができた。8月23日 昨日の石刃の出土した地点の層序をとる。

## 平成11年度発掘調査

6月1日 発掘調査機材の手入れと搬入。6月2日 重機による表土剥ぎ開始。6月3日 遺構検出作業開始。6月8日 林賢氏来跡。6月11日 黒曜石集石検出。6月15日 産業廃棄物となる住宅基礎の除去を遺構を壊さないようにするために手作業で開始する。6月28日 土坑の半剖作業を開始する。基準杭測量現場作業始まる。6月29日 下諏訪町教育委員会宮坂清氏来跡。

7月5日 住居址の掘り下げ開始。7月23日 諏訪市教育委員会五味裕史氏、下諏訪町教育委員会宮坂清氏来跡。7月24日 黒曜石の集石が長野日報で紹介される。7月29日 土坑の半剖終了。7月から8月の中旬にかけては搅乱部の掘り抜き作業を遺構の発掘調査に並行して進める。

8月12日 土坑の完掘作業開始。8月23日 航空測量用のマーキングを行う。8月26日 航空測量実施。8月30日 航空測量補備測量開始。

9月6日 発掘調査終了。引き渡しを行う。

11月22日 路盤工事により遺構が見つかり長野県住宅課と協議の結果調査することが決まり、工事を止める。  
11月25日 調査開始。

12月1日 調査終了、長野県住宅課にすべてを引き渡す。

### 3 遺物の整理と報告書作成の作業

平成11年12月1日 林の峰遺跡の本格的な整理作業開始

平成12年1月29日 第12回長野県旧石器文化研究交流会で林の峰遺跡の発表を行う。

3月27日『林の峰遺跡』——「県営ひばりヶ丘住宅開地」建替に伴う発掘調査報告書——発行

## 第2節 発掘調査の方法

### 1 発掘調査組織

本調査は茅野市教育委員会の直轄事業として実施し、その組織は次のとおりである。

調査主体者 両角 昭二 (茅野市教育委員会教育長) 平成7年9月30日まで

両角 健郎 (茅野市教育委員会教育長) 平成7年10月1日から

両角 源美 (茅野市教育委員会教育長) 平成10年7月31日から

事務局 宮下 安雄 (茅野市教育委員会教育次長) 平成11年3月31日まで

宮坂 泰文 (茅野市教育委員会教育次長) 平成11年4月1日から

文化財調査室 (平成8年3月31日まで)

文化財課 (平成8年4月1日から)

而角 美行 (文化財調査室長) 平成8年3月31日まで

矢嶋 秀一 (文化財課長) 平成8年4月1日から 鵜飼 幸雄 (文化財係長)

守矢 昌文 小林 深志 大谷 勝己 小池 岳史 功刀 司

百瀬 一郎 小林 健治 柳川 英司 大月三千代

調査担当者 柳川 英司 (平成7・8年度担当) 百瀬 一郎 (平成11年度担当)

調査補助員

伊藤千代美 占部 美恵 太田 友子 国 和宣 五味 一郎

田中慎太郎 堀内 潤

発掘調査・整理作業参加者

鵜飼 澄雄 牛山 和男 河西 保明 河西 泰人 北澤 もと

北原きよゑ 萩原 昇 小平 長茂 小平 寛 小林 智子

長田 真 花岡 照友 原 ちよ子 北條 嘉久男 増木 三訓

森 浩子 柳沢 侃 柳沢 九五子 柳沢 宏 柳平 年子

山崎 裕子 吉田 勝太郎 吉田 キヨ子 渡辺 郁夫

平成7年度

遺物実測委託 株式会社 東京航業研究所 代表取締役 中本 直士(埼玉県新座市北野3丁目10番16号)

平成11年度

基準杭測量委託 有限会社 南信測量茅野出張所 出張所長 横内 久幸 (茅野市ちの816番地)

航空測量委託 株式会社 ジャステック販売営業所 営業所長 木下 淳(岡谷市川岸上2丁目1番13号)

石器実測委託 株式会社 アルカ 代表取締役 角張 淳・(小諸市甲49-15番地)

発掘調査期間中、地元宮川、隣接する玉川の方々には埋蔵文化財に対して深いご理解と協力を賜り、また林賢、宮坂清、五味裕史、堀隆氏からは貴重で有益なご指導、助言を賜りました。ここに深甚なる謝意を表します。

## 2 発掘調査区の設定

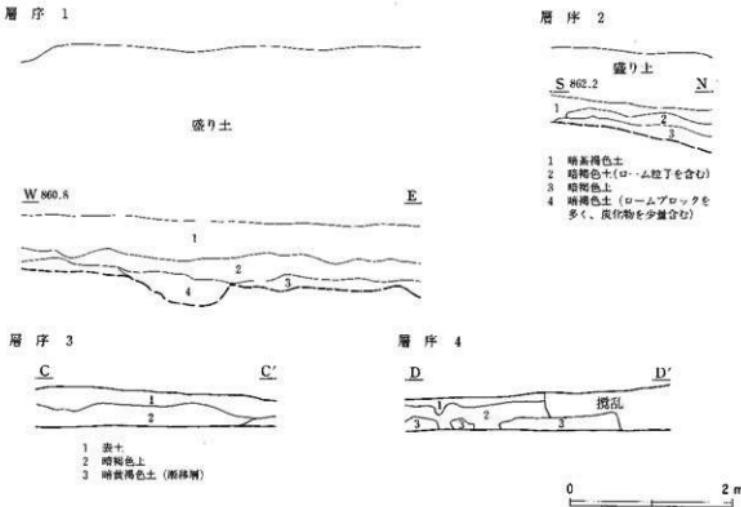
林の峰遺跡は桑畑から最初に住宅用地へ造成された当時、発掘調査が行われていなかったため規模や内容についての全体像は不明であった。更に調査が複数年にわたるため茅野市教育委員会は平成11年度調査区設定に当たり平成7・8年度の試掘調査と発掘調査の成果を基にグリッドの設定を行い、平成7・8年度調査区と連結させるため最長軸となる座標系第VIII系  $X = -1880.000$ ,  $Y = -29500.000$  を基準軸として、10m四方のグリッドを配置し、東西軸をアルファベット、南北軸をアラビア数字で分割し、アルファベットとアラビア数字の組合せで、例えばA-1と表記してある。

## 第III章 発掘された遺構と遺物

### 第1節 林の峰遺跡の層序

林の峰遺跡は八ヶ岳の火砕流が河川によって浸食された手状に広がる長峰状台地上に位置する。発掘調査以前の地形は平坦で、尾根状台地の南側と北側は急斜面になっていた。遺跡の上層観察はこの尾根状台地の頂部（第2図3・4）と北側斜面（第2図1・2）で行った。表土剥ぎを行ったところ北側は層序1に見られるように大量の土砂によって埋められていた。地元の方の話によると埋められたのは県営住宅の造成に伴ってであり、戦後のことだという。ひばりヶ丘団地の開発が昭和39年より43年にかけて行われており、造成されたのはこの時であろう。埋める以前の地表面は残っており、地表面から2m下で確認できた。原地形は層序2に見られるところ比較的緩やかな斜面であったことがわかる。層序1の2層より打製石斧が単独で出土している。耕作によってIII表土層に出てきた物であろう。縄文晩期から弥生時代初頭にかけての条痕文土器が北斜面の下方より出土しており、遺跡は北側の谷にも続いていることが予想される。

尾根の頂部は平坦であり、道路より南側は盛り土がなされていて遺構の状況は意外に良好であった。造成による削平を受けているのは道路敷と道路北側の一部であった。地表から遺構確認面までの深さは全体に30cmから50cmであり、層序3・4とも地表面から30cm程の所に漸移層が確認された。最も表土が厚かったのは東側であり、西に行くほど薄くなっている。層序3は遺構の包含層である第2層がやや搅乱を受けていたが、遺構確認面に遺構の掘り込みが見え、縄文時代中期の遺物が確認できた。これは第1号住居址となった。層序4の3層から旧石器時代と考えられる石刀が出土しており、この層に生活面があったことが考えられる。



第2図 遺跡の層序 (1/40)

## 第2節 平成7年度の調査

遺跡の北側の調査を行った。表土剥ぎ以前の地形は平らな地形であり、北側は急な斜面になっていた。表土剥ぎを行ったところ大量の土砂によって埋め立てられており、原地形は尾根状台地の頂部から緩やかな斜面になっていた。

遺構は土坑を1基検出したのみだった。遺物は土器・黒曜石剝片・石斧・石皿が出土した。

### 検出された遺構

#### 第1号土坑（第4図・図版3）

G-11グリッドより検出。上面直径120cm・底径110cmの土坑。斜面に構築されているため、土坑の北側は検出できなかった。掘り方はしっかりとしている。土坑の堆積状況から自然堆積と考えられる。土坑中から遺物の出土がなかったため時期は不明である。

### 出土した遺物（第4図）

遺物は土坑の南東上のH-10グリッドから集中して出土している。出土遺物は1・3・5である。

1は縄文が施文されており、胎土中に微量ながら纖維を含んでいる。3は2.1cmほどの黒曜石の剝片である。5は長径40cmの石皿。石材は安山岩を使用しており色は赤く、焼成を受けていると思われる。形は橢円形で1/3ほど欠損している。石皿の覆んでいる部分はさほど深くない。これらの遺物が出土した場所はビニール管が敷設されていてかなり破壊されていたが、遺物の集中から見て何らかの遺構が存在した可能性がある。

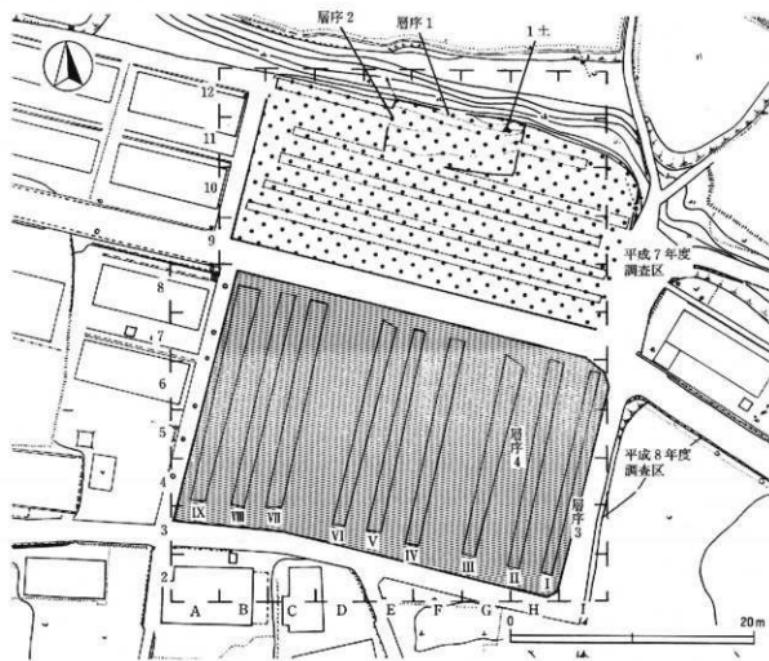
4は遺跡の北寄りやや中央部のF-12グリッドから単独で出土した打製石斧である。石材は粘板岩系の石で色調は緑色である。出土した土層は層序1の1層中である。他に土器などは伴っていない。

2は土坑の北西側G-11グリッドから出土した。条痕文土器と考えられるが小片のためこの破片の部位は不明である。この土器の時期としては大悅遺跡などで出土している条痕文七器に酷似しているため縄文晩期から弥生時代にかけてのものと思われる。出土地点が北斜面の下方にあたるため、北側の谷が遺跡の可能性がある。近年、この時期の条痕文土器が茅野市域で確認されており、長峯（比丘尼原）・御社宮司・大悅遺跡から出土している。

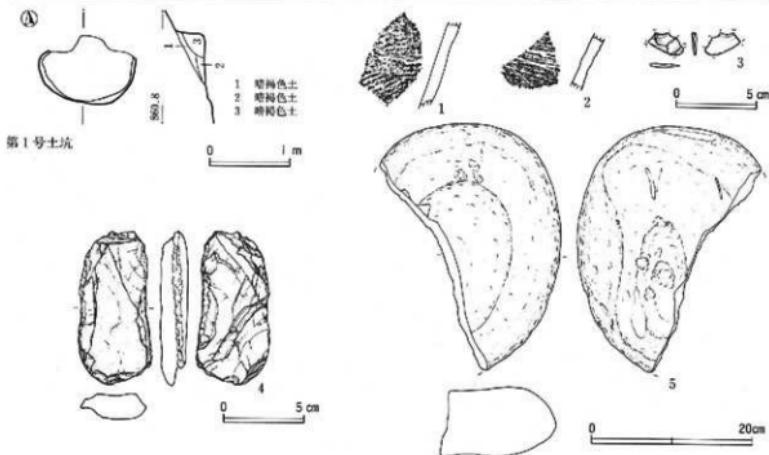
## 第3節 平成8年度の調査（第3図）

平成8年度は試掘調査を行った。場所は尾根状台地の頂部にあたり原地形は平坦である。以前宅地造成を行ったときの搅乱は遺構面まで及んでいなかった。トレチは9本を設定した。

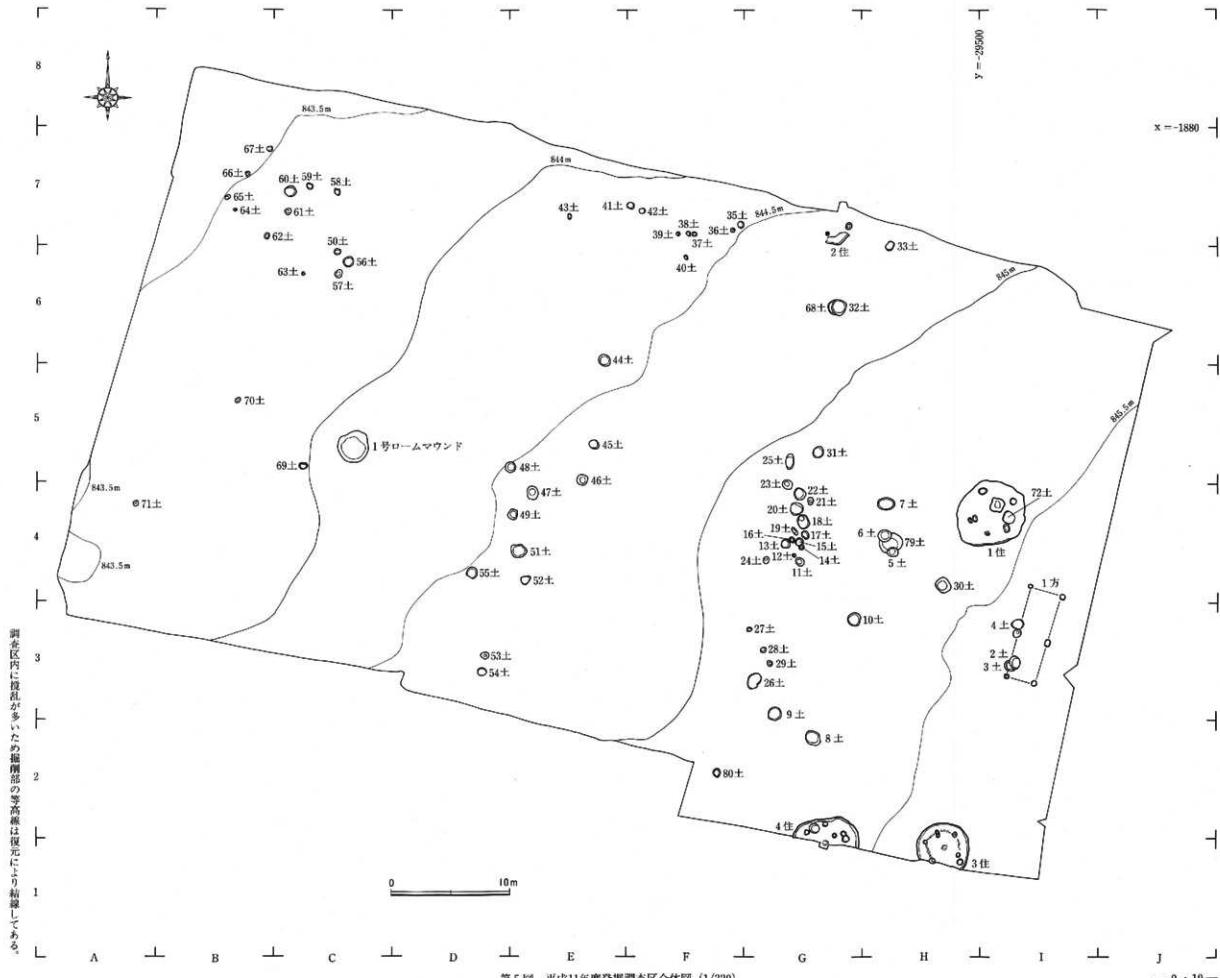
遺構は散発的には調査区全域にわたって検出された。トレチI・IIからは縄文時代中期中葉の住居址が検出された。トレチI・Vからは土坑が、トレチVIIからは焼土址が検出されている。土坑は覆土が堅く締まる暗褐色土であることから縄文時代であると考えられる。焼土址は遺物を伴っていないことから時期は不明である。



第3図 平成7・8年度調査区 (1/100)



第4図 平成7年度出土遺構 (1/60) と遺物 (1~4 1/3, 5 1/6)



遺物は造構外の場所からも散発的に出土している。トレンチIIIからはII石器時代の黒曜石製の石刃が出土している。後述するが、この石刃は長さ10.8cmであり、石質からみて茅野市冷山産のものであろう。この石刃は、層序2の第2層より検出された。トレンチIからは、縄文時代中期中葉の土器片と黒曜石片が出土している。トレンチIIIからも同様の時期の土器片と打製石斧が出土している。トレンチVIからは同時期の土器片と凹石が出土している。

## 第4節 平成11年度の調査

発掘調査区（第5図）は尾根上のなだらかに北側に傾斜する斜面で、住宅団地の建物基礎が残った状態で発掘調査に着手した。造構の密度は東側が濃く、西側は希薄である。遺物は黒曜石や、縄文時代以前の石器や土器などはほとんどで、今まで記録されている土師器の出土は無かった。

### 住居址と遺物

住居址としたものは立合を含めて4ヶ所ある。しかし1ヶ所を除き部分的な調査であり、はっきりしたプランは不明が多くなっている。住居番号は調査順に付けてある。

#### 1. 第1号住居址（第6図、図版5）

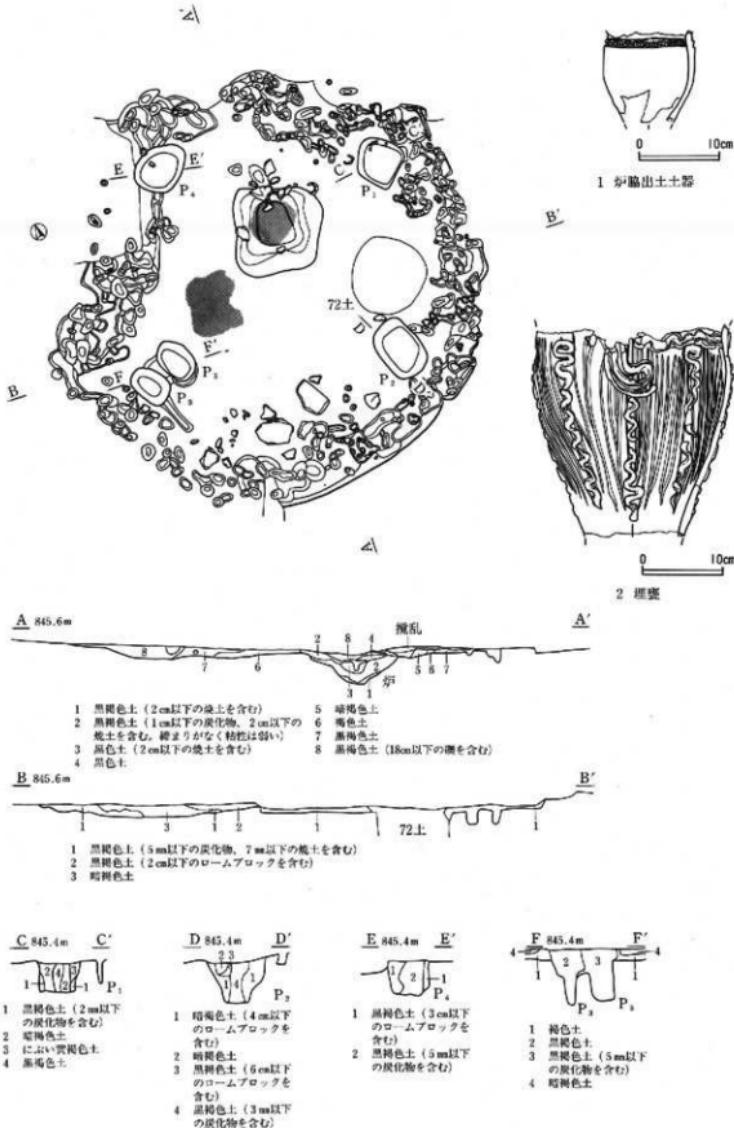
緩やかな北西向き台地上のH-I-4グリッドを中心とする円形を呈する住居址である。規模は長径が5.63m、短径が5.45m、軸方向はN-18°-Eを測る。本址の北西側は住宅基礎のため削られており、柱穴より西外側は土圧変化が著しい。現存していた最大壁高は南側で12cmを測るが、壁を検出したのは全体の20%以下である。壁面の残存部は立上がり部を検出している。周溝は計3本になると想われるが、床面に凹凸が多く軟弱な傾向にあるため明確に分けることができない。主柱穴となるものは5本検出しており4本が方形に並び、1本が南西の柱穴の外側に位置している。柱穴は床面からの深さが平均52cmと深く壁面も堅硬である。埋甕が南側にあり、上部と底部を欠損し正位に据えられており、上面を安山岩系の扁平な火山礫により蓋をしてあった。住居内には焼土ブロックや炭化物混じりの焼土が散在していることから火災住居の可能性がある。炉は一辺約1mの方形石圍炉であったと思われるが、上面は工事による擾乱が著しく破碎された石材が付近に散乱している。深さは38cm。炉の北東側から曾利IIの深鉢が出土していることから本址はこの時期に帰属すると考えられる。

遺物は縄文中期末葉の土器のほかに打製石斧などが出土している。

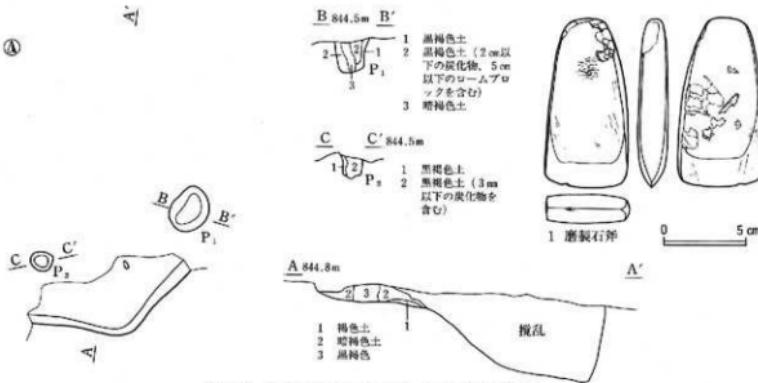
#### 2. 第2号住居址（第7図、図版6）

第1号住居址北西、G-7グリッドを中心として位置する住居址である。本址は南東側の壁と2本の主柱穴を検出しただけで、炉を含めた北西側は深く広く削られている。壁は立上がり部を検出、最大高は14cmを測る。周溝はなく、僅かに残る床面は硬く締まっている。主柱穴は削られた床下より検出しており柱間は1.40m離れている。残存する床面から想定される柱穴の深さは36cmと57cmである。規模、時期は不明である。

遺物は残存した床上から磨製石斧が1点出土しただけである。



第6図 第1号住居址 (1/60)、同出土土器 (1/6)



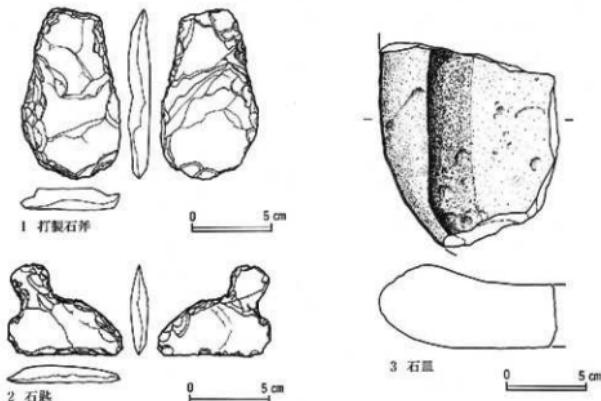
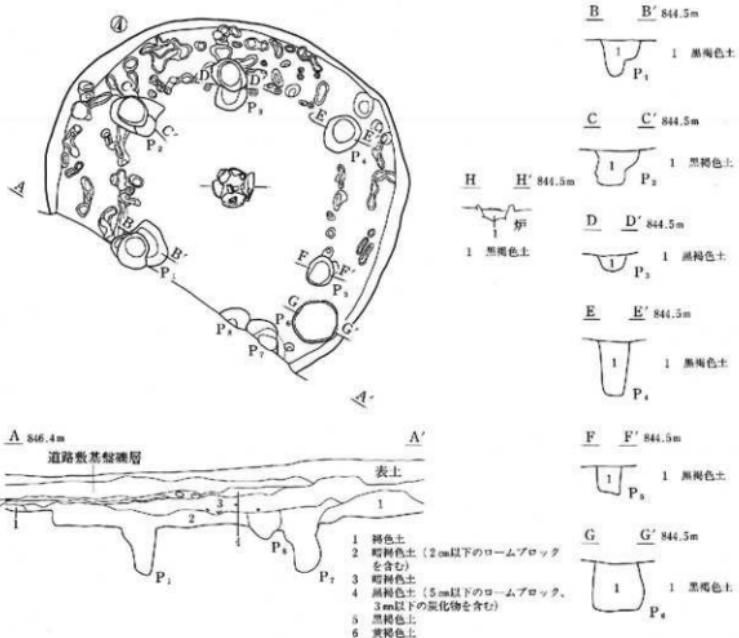
第7図 第2号住居址 (1/60)、同出土遺物 (1/3)

### 3. 第3号住居址 (第8図、図版7)

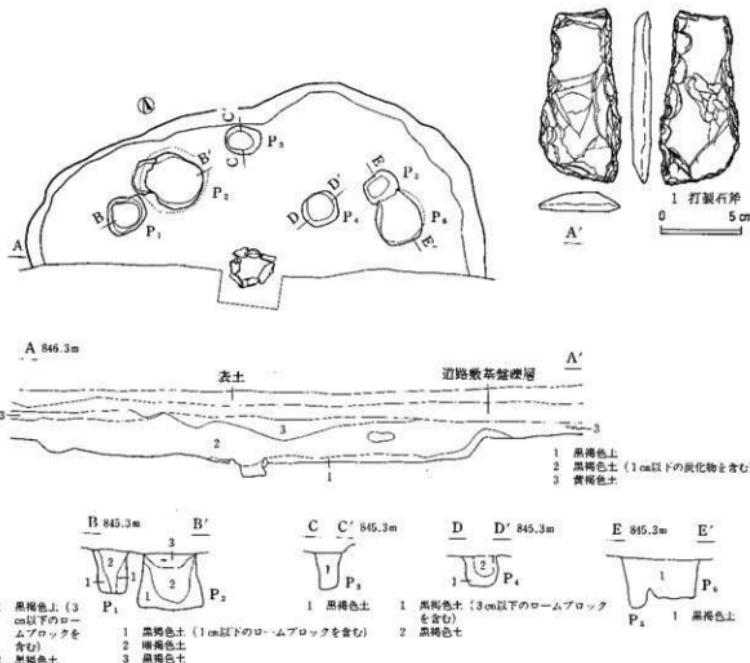
第1号住居址の南側、H-1グリッドを中心とする位置にある。本址は旧道路敷の路盤の入替工事中に見つかり調査する事になった。住居址の南側は民有地となっているため調査区外になっている。規模は長径4.51m以上、現存している壁の最大高は西側のセクション面で20cmを測る。壁面は周溝が巡っている可能性が高いが柱穴より外側の床面が軟弱なため断定はできない。柱穴より内側の床面は凹凸はあるが、綺まりは良好である。主柱穴はP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>がセットになると思われ、切り合いもあることから建替を行っているようである。柱穴は間仕切溝によって結ばれているようだが床が軟弱傾向にあるため存在を断定できない。主柱穴は床面からの平均の深さは58cmを測り、壁面底面ともに極めて堅緻に締まっている。炉は縦縫とともに50cm程の石圓炉で6個のが石が円形の花弁状に並べられている。炉内からは縄文時代中期中葉の土器片が出土していることから同期に帰属する住居である。遺物は縄文時代中期中葉の土器のほかに打製石斧、黒曜石片などが出土している。

### 4. 第4号住居址 (第9図、図版8)

第3号住居址の西側に隣接し、G-1グリッドを中心に位置している住居址である。3住同様道路敷工事により見つかり、南側半分が民有地で調査区外となっている。規模は径5.70m以上となること以外で不明である。現存していた最大壁高は東側のセクション面で26cmを測る。周溝は無い。床面は硬く締まり、主柱穴となるものは5本を検出しておりP<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>の3本とP<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>の2本がセットになると思われ少なくとも2回の建替が行われている。主柱穴は3本が床面からの深さ約60cmと深く、底面壁面とも堅緻である。2本は床面からの深さ約65cmと更に深く、底面壁面とも堅緻で底部が広がる袋状を成す。炉は調査区の境界で8個からなる花弁形の石圓炉である。遺物は少量の縄文時代中期中葉の土器片、打製石斧と石匙が出土していることから同期の住居としたい。



第8図 第3号住居址 (1/60)、同出土遺物 (1/3)



第9図 第4号住居址 (1/60)、同出土遺物 (1/3)

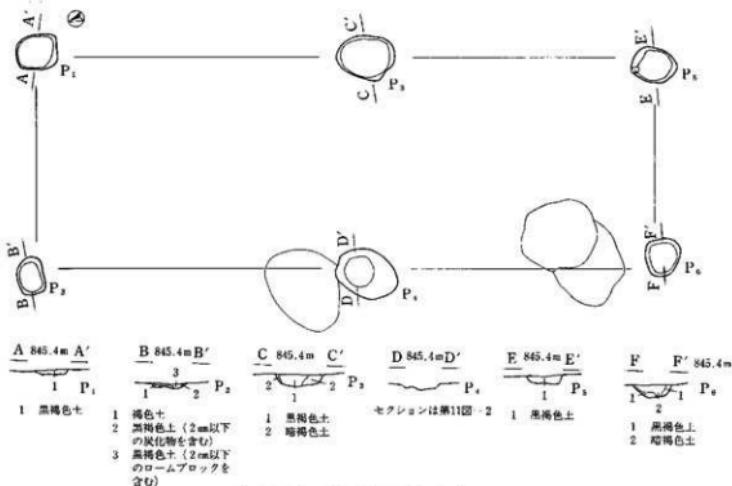
#### 方形柱穴列

##### I. 第1号方形柱穴列 (第10図、図版9)

第1号住居址の南東側、I-3グリッドを中心位置して検出した。3・4住同様道路敷工事により見つかって、全容が現れた。本調査と重なる柱穴もある。規模は長径8.22m、短径3.30mの長方形。長軸方向はN-12°-Eを測る。遺構検出面より深く路盤が入れられていたため、路盤除去後の立合溝時に検出した際の深さは6-16cmと浅いが本調査で見つかっている柱穴は遺構検出面から40cmの深さを持っており、柱穴底のレベルから6本全てが検出面から同様の深さがあったと考えられる。柱穴内に遺物は無かった。

#### 土坑と遺物

調査区が住宅跡であるため土坑として取り上げたものは人為的に土中に穿たれている穴の中で底面の締まっているものを便宜的に土坑としている。土坑番号は検出順に82番まで付けてあるが方形柱穴列の柱穴も当初切合関係から土坑として扱ったため土坑番号が付いている。また1ヶ所あるロームマウンドも土坑として調査を開始したため番号が付いている。土坑個々の詳細は後日稿を改める予定であるが柱穴、ロームマウンド以外の土坑で特色ある土坑を9基記しておく。



第10図 第1号方形柱穴列 (1/60)

#### 1. 第2号土坑 (第11図1)

I-3グリッドの1号方形柱穴列に接して位置する。上面は直んだ楕円形で長径99cm、短径92cm、坑底も直んだ楕円形を呈し長径76cm、短径68cm、断面は鍋形で深さは46cmである。遺物は縄文時代中期曾利IIの土器が出土している。

#### 2. 第3号土坑 (第11図1)

I-3グリッドの2号土坑西側に接し2号土坑により北東側が切られている。上面、下面とも直んだ楕円形になると思われ上面の長径110cm以上、短径83cm以上、底面も長径が51cm以上、断面は皿形を呈し、深さは17cmである。遺物は縄文時代中期曾利IIの土器が出土している。

#### 3. 第4号土坑 (第11図2)

I-3グリッドの2号土坑北側に位置し1号方形柱穴列中央西側の柱穴と切合っている。上面、下面とも楕円形で上面は長径113cm、短径88cm、底面が長径102cm、短径77cm、断面は皿形を呈し、深さが18cmである。遺物は縄文時代中期末葉の綾杉文の深鉢胴下部が出土している。

#### 4. 第8号土坑 (第11図3)

G-2グリッド位置する。上面、下面ともに直んだ楕円形で上面の長径124cm、短径112cm、下面の長径109cm、短径86cm、断面は鍋形で深さが27cmである。遺物は縄文時代中期曾利期の土器片、堆積岩系の石匙と球果の多く入った黒曜石の剝片が出土している。

#### 5. 第9号土坑 (第11図4)

8号土坑の北西側、G-3グリッドに位置し、南側は造成の搅乱により削られているが坑底は残っている。上面、下面ともに直んだ楕円形で上面の長径121cm、短径100cm以上、下面の長径107cm、短径86cm、断面は鍋形を呈し、深さが32cmである。北よりの上面から厚さ2cmで焼土ブロックを疊らに含む層を検出している。遺物は縄文時代中期曾利期の土器片が出土している。

#### 6. 第32号土坑（第11図5）

2号住居の南側、G-6グリッドに位置する。西側は68号土坑と切り合い関係にある。上面は歪んだ円形で長径133cm、短径127cm、下面が径105cmほどの円形。断面は鍋形を呈し、深さが45cmである。遺物の出土はなかった。

#### 7. 第44号土坑（第11図6）

E-6グリッドに位置し、埋設物により上部が搅乱を受けている。上面は歪んだ円形で長径107cm、短径97cm、下面が径76cmほどの円形。深さは67cmで鍋状を呈する。遺物の出土は無い。

#### 8. 第50号土坑（第11図7）

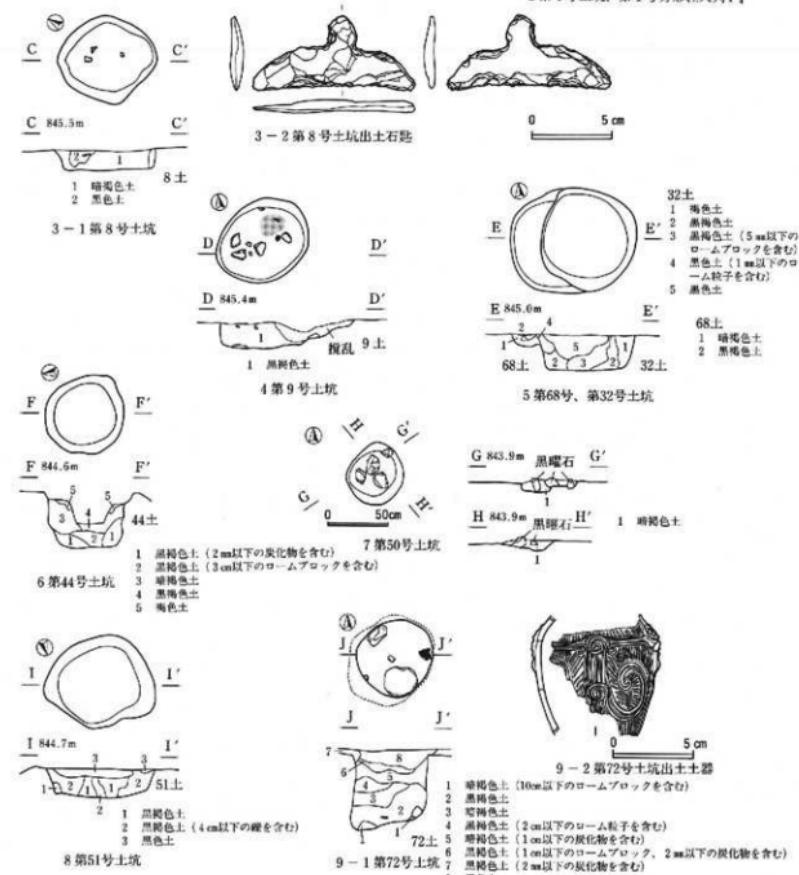
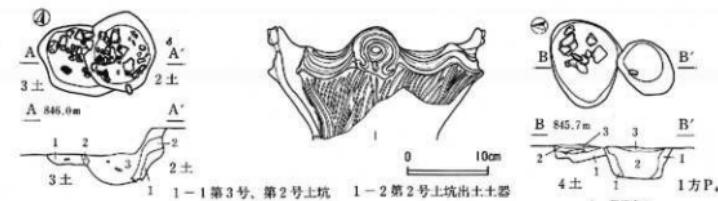
C-6グリッドに位置する。表剥ぎの際黒曜石の石核が見つかり、遺構を確認するため検出作業を慎重に行ったところ大型の石核4点が土坑底に一括して埋納されたような状態で出土した。土坑は上面が歪んだ円形で長径52cm、短径47cm、下面是歪んだ楕円形で長径40cm、短径34cm、皿状を呈し、深さが18cmである。石核で1kgを超える大形の3点は下方の幅が狭くなっている部分に交叉剥離を観ることができ、細部調整をされていることからあたかもショッピングツールのように見える。残る小形の1点は0.5kgに及ばないが打面板位や1面に打痕を7ヶ所観ることができる。石核石材の黒曜石はいずれも球顆を含み流理構造が発達していることから冷山産の可能性が高い。ほかに遺物の出土ではなく、周辺にも同様の遺構や黒曜石の剥片、碎片も見つからなかったため時期決定資料には乏しいが、層序及び石核に残る細部調整の技法と、水和が進みやすい酸性の強いローム層の直上から出土している割に黒曜石裏面に明瞭な水和が見られない等の状況から旧石器時代後期の遺構と考えたい。

#### 9. 第51号土坑（第11図8）

E-4グリッドに位置し、北側が埋設物により搅乱されている。上面は歪んだ円形で長径141cm、短径120cm以上、底面は歪んだ隅丸方形で長径103cm、短径96cm、鍋状を呈し、深さは38cmである。遺物の出土は無かった。

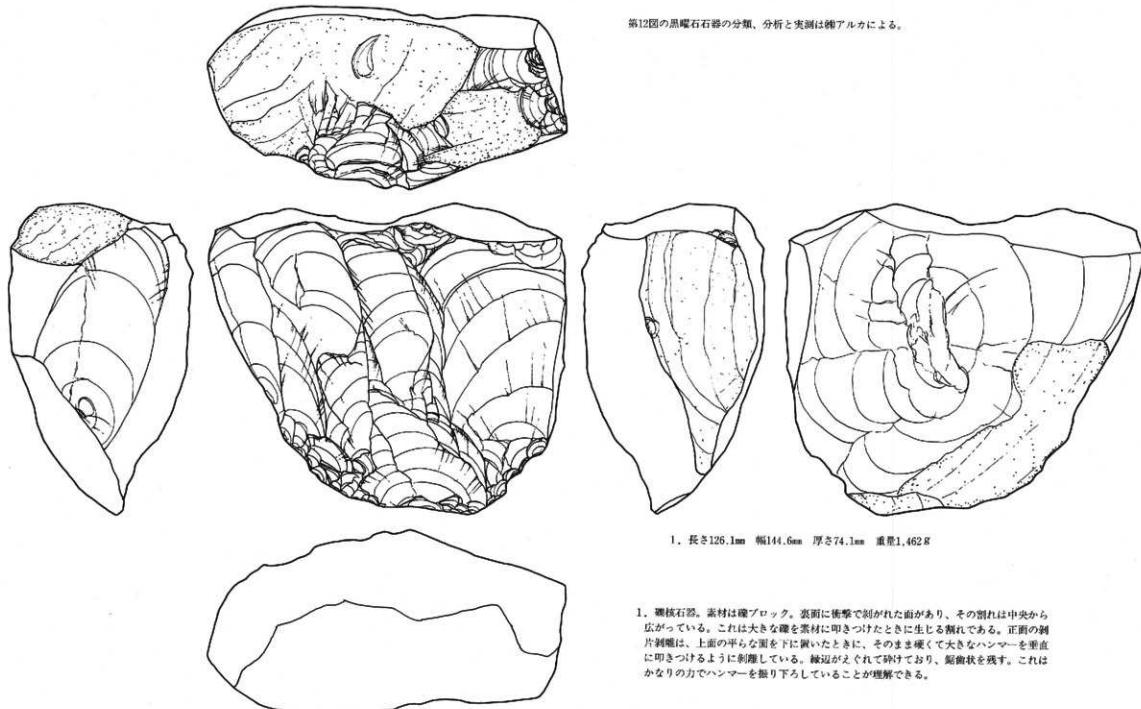
#### 10. 第72号土坑（第11図9）

I-4グリッドの3号住居内の東側で明らかに住居を切って位置している。上面は歪んだ円形で長径97cm、短径95cm、坑底は東側に傾きながら広がり最深部は深さ101cm、形態は袋状を成し、坑底の長径122cm、短径100cmである。遺物は縄文時代中期末葉の唐草文系土器と扁平な火山器などが出土している。



第11図 第3・2・4・8・9・68・32・44・50・51・72号土坑 (50土のみ1/40はかは1/60)、同遺物

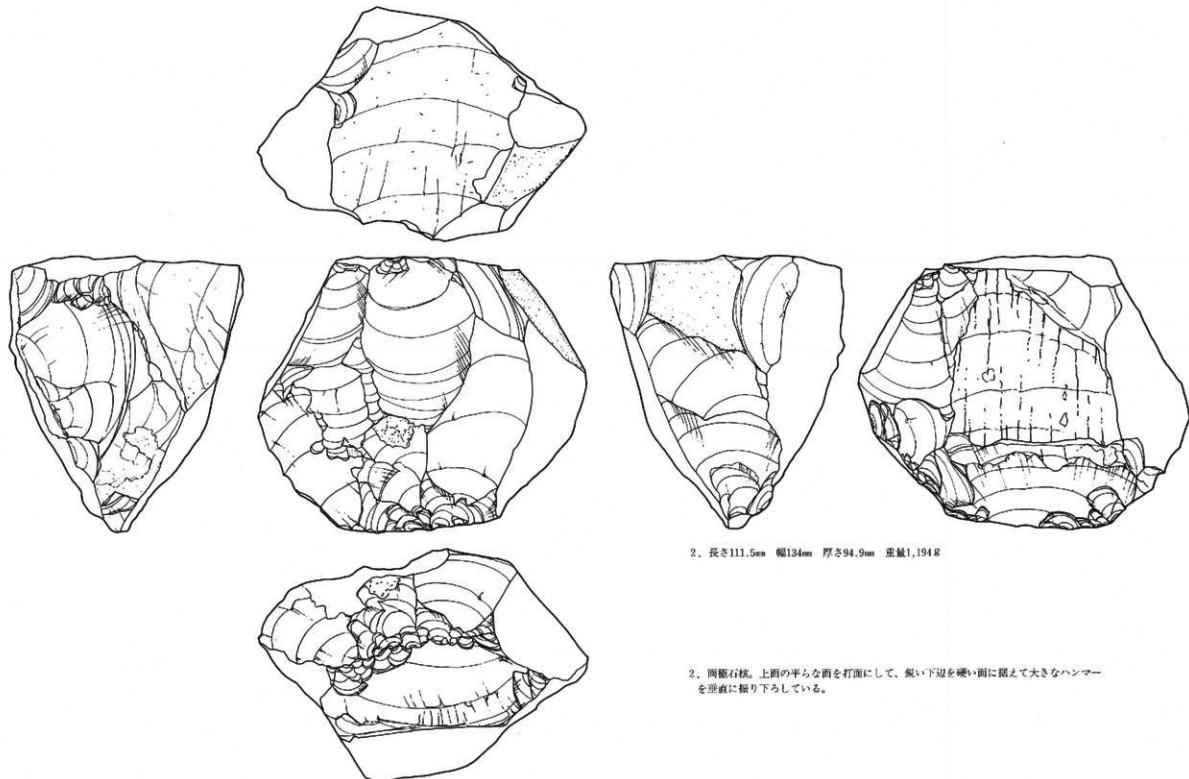
第12図の黒曜石器の分類、分析と実測は神アルカによる。



I. 長さ126.1mm 幅144.6mm 厚さ74.1mm 重さ1,462g

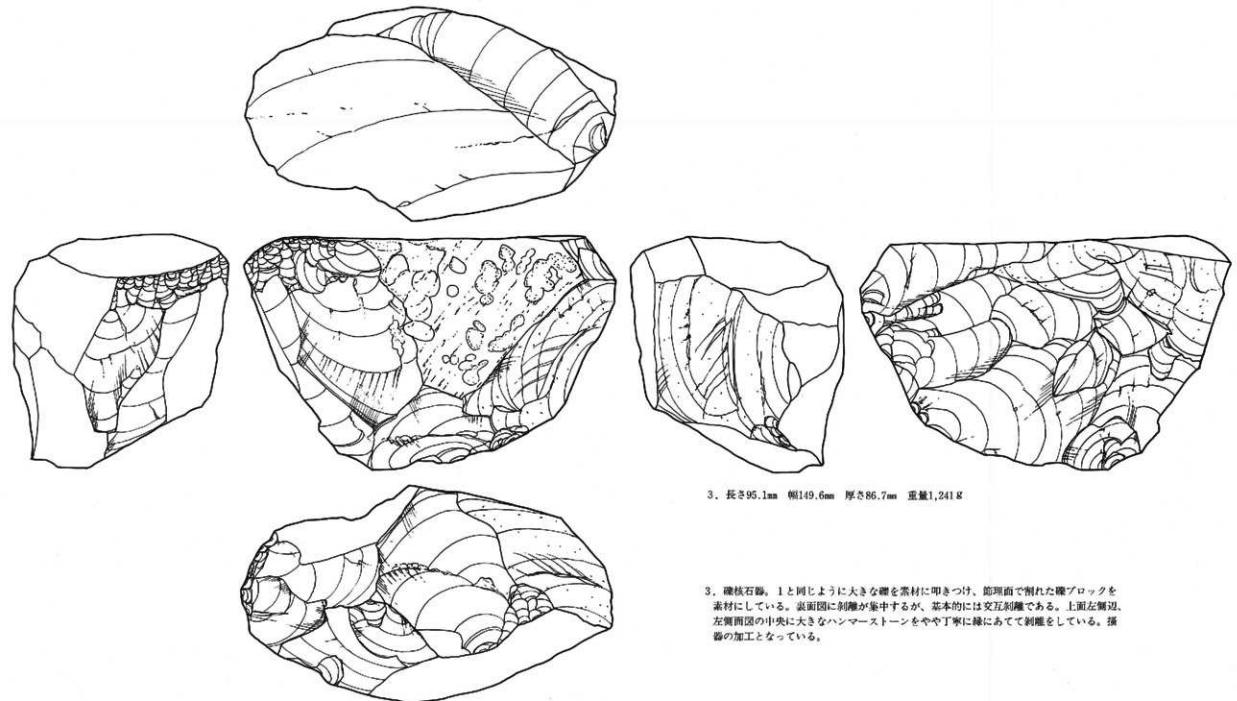
1. 球核石器。素材は瓈グロッケ。表面に衝撃で割かれた面があり、その割れは中央から広がっている。これは大きな球を素材に叩きつけたときに生じる割れである。正面の剥片剥離面は、上面の平らな面を下に向いたときに、そのまま極めて大きなハンマーを垂直に叩きつけるように剥離している。縫合がよくれており、屈曲状を残す。これはかなりの方でハンマーを振り下ろしていることが理解できる。

第12図-1 第50号土坑出土遺物1 (2/3)

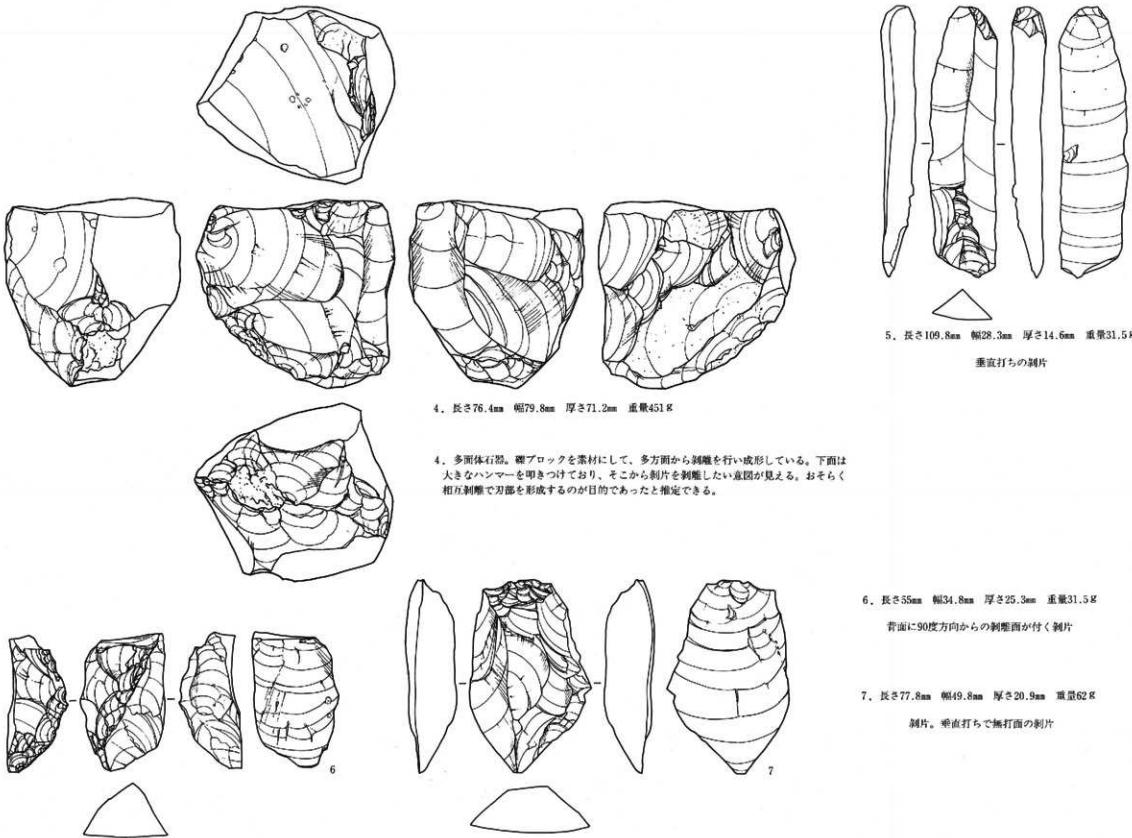


2. 長さ111.5mm 幅134mm 厚さ94.9mm 重量1,194g

2. 梱槌石棒。上面の平らな面を打面にして、軽い下邊を硬い面に据えて大きなハンマーを垂直に振り下ろしている。



第12図-3 第50号土坑出土遺物3 (2/3)



第12図-4 第50号土坑出土遺物4、トレンチ田、第8号土坑、遺構外出土遺物

## 第IV章 まとめ

林の峰遺跡は昭和30年代に住宅用地の造成が始まり、発掘調査が行われていなかったため不明な点が多い。今回の発掘調査に当たってもほぼ全面が基礎工事及び埋設物の工事により搅乱を受けている。そこで遺跡の性格を示す上で重要なのは周辺遺跡の状況と環境である。湧水は少量ながら遺跡の広がる尾根の南向き斜面から滲み出しており、宮川支流の田沢々川に流れ込んでいる。

最も古い遺物は50号土坑の黒曜石核である。検出にあたっては土坑周囲から黒曜石碎片、剥片の出土がほとんど無く、浅い皿状の土坑底に張り付くように埋納されていた。出土している石核は4点で、ほかに時期決定資料となる遺物を欠くが細部調整の技法から旧石器時代後期の可能性が高い。合計重量は4.5kgでひとつの遺構から出土した黒曜石核としては県内最大級である。周辺遺跡で旧石器時代の遺物出土7例は本遺跡北側の尾根上の長峰遺跡から1981年片面調整の槍先形尖頭器が見つかっている。石材の黒曜石はいずれも球顆を含み流理構造が発達しており冷山産の可能性が高く、原産地の問題を含めて興味深い。不明な点が多い八ヶ岳の裾野の仰石器時代研究にこの黒曜石核は同期解明資料のひとつとして多くの課題を投げかけている。

林の峰遺跡は縄文時代中期の遺跡として以前から捉えられており、発掘調査でも調査区の東側から中期中葉の住居址2軒、円窓窓の住居址1軒と細かな時期決定はできないが、中期の住居址1軒を検出、調査区外になるが隣接する東側の畑や宅地からは縄文時代中期の土器片や石皿なども見つかっていることから、縄文時代の集落は調査区の南東側にかけて広がっている可能性が高い。

弥生土器や上師器出土の記録もあるが今回の発掘調査において見つかったのは北側の斜面から条痕文土器片が1点出土しただけである。

最後に大正時代から知られていた林の峰遺跡は、地元においても関心が高く、今回の発掘調査に当たっては関係各位からご高配、ご協力を得ることができた。その中には参考になることも多々あり感謝する次第である。しかし3年間に及んだ発掘調査が、諸々の事情により整理作業は短期間で行わなければならず分析、考察面では不十分な点があり、多くの課題を残す結果となった。林の峰遺跡の全容解明に向け今回の調査では未だ不明な事もあり、今後稿を改める予定である。

### 引用参考文献

- 島居龍藏 1924 「源説史」第一巻 信濃教育会源説部会  
信濃史料刊行會 1956年 「信濃史料第1巻上」  
源説史綱目 1958 「源説史綱目(6)字野市宮川篇」  
今井すみ江 1959 「田宮川村史編纂会研究其の6」「田宮川村に於ける縄文式文化時代(附弥生式文化時代)遺跡」  
長野県教育委員会 1980 「八ヶ岳西面遺跡群分布調査報告書 昭和54年度」  
小林秀夫・有瀬長秀・他 1982 「御社宮河遺跡」「長野県中央地理文化財図書庫地発掘調査報告書—茅野市その一」長野県教育委員会  
茅野市教育委員会 1986 「茅野市史 上巻 原始・古代」  
信長野県史刊行會 1988 「長野県史 考古資料編 全一巻(四) 遺構・遺物」  
茅野市教育委員会 1990 「傳記」  
茅野市教育委員会 1991 「茅野市道跡台帳」  
茅野市教育委員会 1992 「神垣外遺跡」  
茅野市教育委員会 1995 「大祝遺跡」  
長野県旧石器文化研究交流会 2000 「第12回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨」

# 図 版

図版 I



林の峰遺跡発掘調査区航空写真（南東側から）

林の峰路・運営調査区全景 手前建物部分が平成 7 年度調査区（北側から）



図版 3



①平成 7 年度表土剥ぎ



②平成 7 年度調査区全景（西より）



③平成 7 年度土層状況（東より）



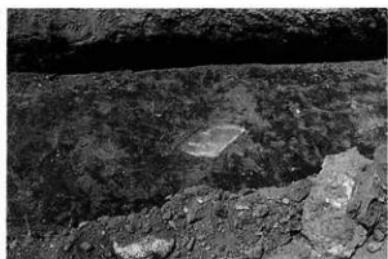
④第 1 号土坑（北より）



⑤平成 8 年度試掘風景



⑥平成 8 年度試掘状況（東より）



⑦第 1 号住居址検出状況（西より）



⑧石刃出土状況



①平成11年度表土剥ぎ（南東側から）



②造構検出作業（南側から）



③第1号住居址発掘作業風景（東側から）



④実測風景（東西側から）



⑤調査区から除去した産業廃棄物の集積作業（北側から）

図版 5



①第1号住居址全景（南側から）



②第1号住居址炉（東側から）



③第1号住居址炉脇出土土器（東側から）



④第1号住居址埋甕（東側から）



①第2号住居址全景（南側から）



②第2号住居址出土磨製石斧（南西側から）

図版 7



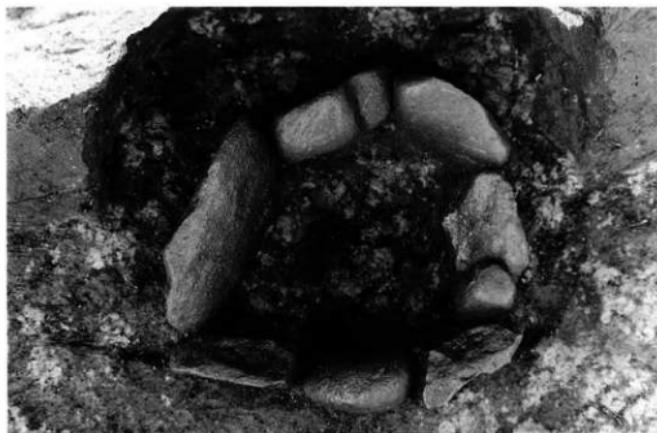
①第3号住居址全景（北西側から）



②第3号住居址炉（南東側から）



①第4号住居址全景（北側から）



②第4号住居址炉（北側から）

図版 9



①第1号方形柱穴列（北側から）



②第1号方形柱穴列（南側から）



①第50号土坑黒曜石出土状態（南側から）



②第50号土坑検出状況（西側から）



③第50号土坑完掘状況（北西側から）

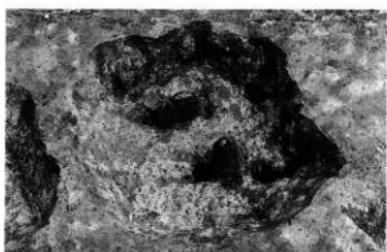
図版II



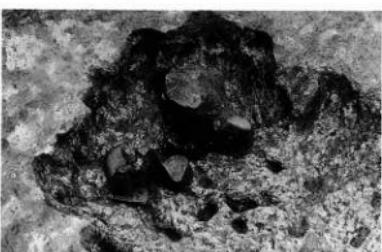
①第3・2号土坑遺物出土状態（南側から）



②第4号土坑遺物出土状態（東側から）



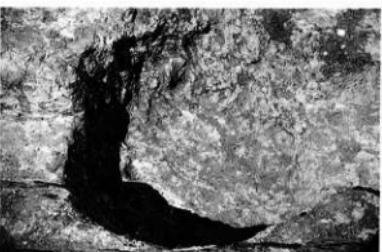
③第8号土坑遺物出土状態（南側から）



④第9号土坑遺物出土状態（南側から）



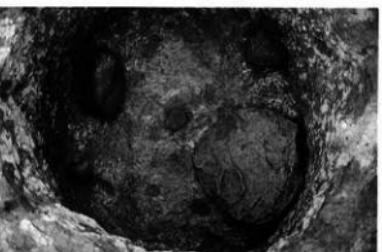
⑤第32号土坑（北側から）



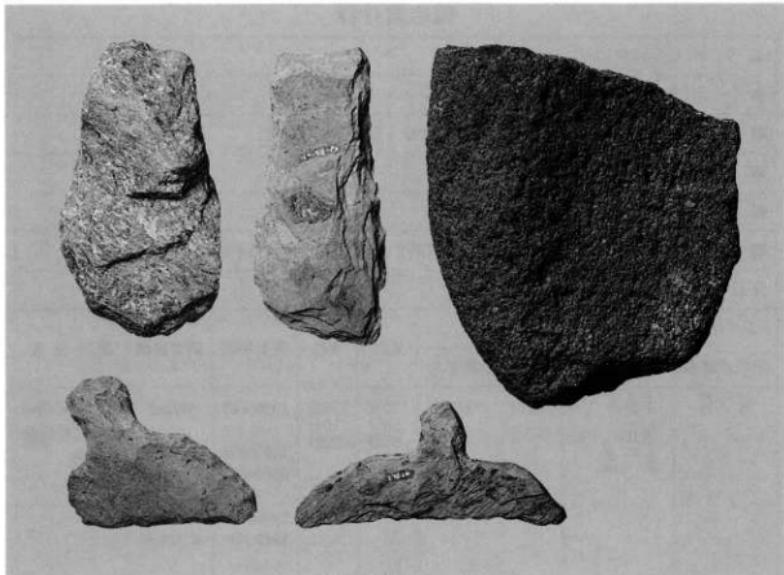
⑥第44号土坑（南側から）



⑦第51号土坑（北側から）



⑧第72号土坑遺物出土状態（北東側から）



①林の峰遺跡出土石器



②発掘調査に携わった人々

報告書抄録

ふりがな	はやしのみねいせき							
書名	林の峰遺跡							
副書名	「県営ひばりヶ丘団地」建替に伴う発掘調査報告書							
編著者名	柳川英司 百瀬一郎							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391-8501 長野県茅野市塙原2丁目6番1号 Tel 0266-72-2101							
発行年月日	西暦2000年3月27日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
林の峰	茅野市 宮川 両久保	20214	147	35度 58分 55秒	138度 10分 22秒	19950907 ↓ 19950925 19960821 ↓ 19960823 19990601 ↓ 19991201	900m <sup>2</sup>  1,312m <sup>2</sup>  4,500m <sup>2</sup>	県営住宅附地 建替に伴う発 掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
林の峰	集落跡	縄文	住居址4軒 建物址1軒 土坑82基	縄文時代中期中葉、末葉土器・石器	条痕文土器		旧石器時代後期のアボから黒曜石石核出土	

---

---

## 林の峰遺跡

—「県営住宅いばりヶ丘同地」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

---

平成12年3月21日 印刷

平成12年3月27日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番1号  
発行 茅野市教育委員会

印刷 永明社印刷所  
長野県茅野市塚原2丁目12番30号

---

